

# 子どもの本

研究会



【私の一冊】

『二十世紀の意味―偉大なる転換―』（岩波新書 1967年）

K・ポールディング著 清水幾太郎訳

松岡享子

拙著『子どもと本』は、昨年二月、難航の末ようやく刊行にこぎつけたが、難航した理由のひとつは、それが岩波新書だということであった。長年、多くの岩波新書に教えられ、助けられ、刺激を受けてきた一読者であつてみれば、それが突然執筆者の側にまわるには、困惑やためらいを超える重圧があつたからである。わが本棚に並ぶ岩波新書の列を眺めると、とても自分の書くものがその横に置かれるとは想像しにくかつた。

手もとにある百冊を優に超える岩波新書のうち、おそらくいちばん衝撃を受けたのは堀田善衛の『インドで考えたこと』であり、いちばんくり返し読んだのは、K・ポールディングの『二十世紀の意味』であろうか。一九六四年に刊行された後者（邦訳は一九六七年）は、二十一世紀も早六分の一近くが経過した現在、考察すべき新しい現象や問題がいくつも出現しているとはいへ、わたしにとつての基本的意味は変わっていない。

歴史を大きく文明前、文明、文明後ととらえらるゝ方。食糧の余剰が文明前から文明への移行を促し、知識の余剰が文明後への転換をもたらしつつあるという分析。二十世紀を文明から文明後への転換の時期ととらえ、人類がこの転換を成功させるのを妨げると予測されるいくつもの「落とし穴」の提示。そして、最終章で説かれる、わたしたちがこの危機を避け、困難な転換をうまく乗り越えて“生き延びる”ためには、精神圏に変化を起こさなければならないとの著者の訴えには、強く説得され、共感する。本を読むことの意味、図書館員という仕事の意義を思うとき、この著者の訴えが、心の奥で絶えず響いて、わたしの支えとなつてきたことを感じる。

（公益財団法人 東京子ども図書館 名誉理事長）